



日本イスタニヤ学会「会報」

Boletín de la Asociación Japonesa de Hispanistas

第24号 (2017年10月1日) / Núm. 24 (1 de octubre, 2017)

事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1
第2ユニオンビル4F
株ガリレオ 学会業務情報化センター内
Tel:03-5981-9824 Fax:03-5981-9852
e-mail: g004esp-mng@ml.gakkai.ne.jp
(<http://www.gakkai.ne.jp/ajh/>)

広報委員会編集部

〒261-0014 千葉県千葉市美浜区若葉1-4-1
神田外語大学外国語学部
イベロアメリカ言語学科
青砥清一宛
Tel:043-273-1344 (内線)
e-mail: aoto1230@kanda.kuis.ac.jp

目次

【巻頭言】

上田博人 del と al の歴史的形成…………… 2

【エッセイ】

1. 本田誠二
フェリペ六世スペイン国王陛下の謁見の場に立ち会って…………… 3
2. 江藤一郎 定年退職を迎えて…………… 5
3. 青砥清一 わが国の高等学校におけるスペイン語教育について…………… 6

【書評】

1. 柳原孝敦 小阪知弘『村上春樹とスペイン』…………… 8
2. 花方寿行 エミリア・パルド＝バサン『ウリョーアの館』…………… 9
3. 花方寿行 セサル・バジェホ『セサル・バジェホ全詩集』…………… 10
4. 久野量一 エドゥアルド・ハルフォン『ポーランドのボクサー』…………… 11
5. 柳沼孝一郎 神田外語大学＝編『環太平洋の言語と文化』…………… 12
6. 加藤伸吾 牛島万(編著)、坂東省次(監修)
『現代スペインの諸相——多民族国家への射程と相克』…………… 13

【新刊案内】(2016.6～2017.5)…………… 15

【2017年度日本イスタニヤ学会奨励賞】…………… 16

【『HISPANICA』編集委員より】…………… 16

【編集後記】…………… 16

【巻頭言】

del と al の歴史的形成

上田 博人

この三月に大学を退職して一人で勉強を始めたとき、日本イスパニヤ学会の編集委員会から会報の巻頭言を依頼された。ありがたく頂いたこの機会に、古い伝統をもつスペイン語文献学の先行研究と、スペインの友人たちが作成した最新のデジタル古文書資料と、現在開発中の自作分析装置を使った小さな研究例として、定冠詞 *el* と縮約形 *del*, *al* の歴史的形成について考察したことを簡単に記したい。

最近の歴史言語学研究で「文法化」*gramaticalización* の現象がしばしば取り上げられる。ふつう文法化と言え、たとえば、ラテン語 *HABEO* 「私が持つ」 + 過去分詞 → スペイン語 *he* + 過去分詞、に見られる一般動詞（非文法語） → 助動詞（文法語）のような変化を指すが、*del* と *al* のような文法語どうし（前置詞 + 定冠詞）の縮約 *contracción* なども扱われる。そこでは「*de* と *el*, *a* と *el* が頻繁に共起したために融合した」と説明されている (Bybee 2007: 330; Elvira 2015: 18)。

しかし、年代が確定される公証文書資料 (CODEA) を分析装置でいくら探しても、次の頻度表が示すとおり、*del*, *al* ばかりであって縮約の始点となるべき分離形の *de el*, *a el* がほとんど見られない。さらに遡って 1100 年代を扱った別資料 (CORHEN) でも見つからない。(表中にある少数の分離形 *de el*, *a el* は *de la*, *a la* などとの類推によって散発した例外的な表記であろう。)

語形 ↓ 年代 →	1200	1300	1400	1500	1600	1700
<i>de el</i> / <i>a el</i>	6 / 3	2 / 1	0 / 5	19 / 3	51 / 9	16 / 1
<i>del</i> / <i>al</i>	1920 / 912	1829 / 805	2247 / 870	2858 / 1050	1358 / 418	426 / 201
<i>de la</i> / <i>a la</i>	309 / 31	110 / 17	145 / 26	370 / 117	451 / 93	171 / 33
<i>dela</i> / <i>ala</i>	957 / 203	992 / 399	1303 / 344	1590 / 390	427 / 139	171 / 46

このように分離形の表記 *de el*, *a el* は僅少であったが、音声についてはどうだろうか。音声の縮約を想定するには [*de el*], [*a el*] のような分離形や、少なくとも [*deel*], [*ael*] のような結合形が多用されていなければならないが、これが上の資料からもスペイン語音声史からも想定しにくい。

Menéndez Pidal (1926: 331) はスペイン語の 11c 以前のいわゆる「始源」*Orígenes* に起きた *ela*, *elos*, *elas* > *la*, *los*, *las* における語頭 *e*- の脱落を「前置詞との接合」によると断言したが、私は数々の前置詞の中でもとくに *de* を、語末が *-e* であることから重視する。(*de* の語末の *-e* と定冠詞古形 (*elo/ele*, *ela*, *elos*, *elas*) の語頭の *e*- は融合しやすかったはずだ。) よって、語頭 *e*- が脱落して *la*, *los*, *las* という語形が生まれた時以前に *dela*, *delos*, *delas* が存在していたことになる。当然 *de*+定冠詞男性単数形 *delo* / *dele* の形成も同時期であったと推定できる (11c 以前の文献資料は少ない)。その *delo* / *dele* は語尾が *-o* / *-e* であったことと、後述する高い文法性によって、*del* に短縮した。*delo* / *dele* と形態が類似する定冠詞 *elo* / *ele* も同様に *el* となったのだろう。*dela* は話者の意識の中で単純に分立して *de la* となったが、*del* は *de-l* または *d-el* とは分けられないので総合的に 1 語の *del* と認識された。

del の「文法性」*gramaticalidad* はきわめて高かった。文法性の特徴は希薄な意味、短縮・融

合された語形、高頻度使用である。de は、同様に-e で終わる前置詞 ante, entre, sobre などと比べると、用途の範囲が格段に広く多用され、意味は希薄である。そして男性単数形の定冠詞は性・数について無標 no marcado であった。文法性の高さについて del に続くのが al である。al は、多様な用途、母音との融合、短い語形、高頻度、男性単数という特徴を del と共有している。

よって de el > del, a el > al という共時的分析や教授法は有用であるが、通時的に見れば「高頻度使用による縮約」というプロセスはかつて存在せず、スペイン語史の初めから del, al が el と共に成立していたはずである。そして del と al だけが前置詞(de, a)の語末母音と最高度の文法性という条件を備えていたために、de la, de los, de las / a la, a los, a las や ante el, sobre el 等と一線を画して、その縮約形を保持したのだろう。

参考：Bybee, J. 2007. *Frequency of use and the organization of language*. Oxford University Press. / Elvira, J. 2015. *Lingüística histórica y cambio gramatical*. Madrid. Editorial Síntesis. / Menéndez Pidal, R. 1926. *Orígenes del español*. Madrid. Espasa-Calpe.

*この文章について Sr. Pedro Sánchez Prieto、斎藤文子さん、川崎義史さんから貴重なコメントをいただきました。ここに記して感謝いたします。

*歴史資料と分析装置は次を使用しました。ご利用を希望される方は下記の LYNEAL のサイトに載せたメールアドレスにご連絡ください。

CODEA (Corpus de Documentos Españoles Anteriores a 1800):

<http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/lyneal/codea.htm>

CORHEN (Corpus Histórico del Español Norteño):

<http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/lyneal/corhen.htm>

LYNEAL (Letras y Números en Análisis Lingüísticos):

<http://lecture.ecc.u-tokyo.ac.jp/~cueda/lyneal/>

(うえだ・ひろと 東京大学名誉教授)

【エッセイ 1】

フェリペ六世スペイン国王陛下の謁見の場に立ち会って

本田 誠二

去る四月四日から七日までスペイン国王ご夫妻が国賓として訪日されたが、両殿下は宮中晩餐会や安倍首相主催の晩餐会など、お忙しい公式行事をこなされる間に、六日の午後、全国のスペイン協会やスペイン語学科、スペイン語やスペイン文化の普及に貢献されている学会や団体を代表する方々を、東京の帝国ホテルに招かれて、会見を催された（王妃は都合でご欠席）。日本イスペニヤ学会からは前会長や現会長の諸先生方、東京外大学長をはじめとするお歴々が参列された。私もその末席を汚して、謁見の榮譽に浴すことができた。国王陛下は百九十センチを超える長身のスポーツマンで、その凛々しい御姿と常に絶やさぬ温かい笑顔が印象的であった。国王陛下は四十人ほどの列席者すべての方ひとり一人と、親しく御言葉を交わされた（通訳あり）。



翌日の七日には両殿下は天皇皇后両陛下のお招きで静岡市に赴かれ、徳川慶喜公屋敷跡「浮月楼」にて、久能山東照宮所蔵になる重要文化財「洋時計」をご覧になった。これはかつてスペイン国王フェリペ三世より海難救助のお礼として徳川家康公に贈られたもので、かねてよりその重要性から神宝として大切に保管されてきたものである。経緯を簡単に記すと、慶長十四年(1609年)九月三十日、メキシコに帰国せんとしていたフィリピン総督ロドリド・デ・ビベロが乗船していたガレオン船サン・フランシスコ号は、千葉県房総沖で暴風雨に遭って御宿に漂着した。その際、乗船員三七三名のうち五六人が溺死し、三一七名が地元の海女さんたちの命がけの救助で一命を取り留めた。彼らは領主および村民から手厚く保護されて生き延びたのである。ビベロはその後、江戸に出て、二代将軍秀忠公に会い、さらに駿府まで足を運んで家康公に面会を果たしている。家康公は外交顧問となっていた三浦按針(ウィリアム・アダムス)が伊東で建造していた西洋帆船一隻をビベロに与えて、日本人船員二名を乗せて、一行をメキシコまで送り届けた。ビベロたちは家康公の温情に感服して旅立っていった。そして二年後の慶長十六年(1611年)にスペイン国王フェリペ三世およびメキシコを統治する副王ルイス・デ・ベラスコは、海難救助のお礼と日本人船員を送り届けるべく、セバスティアン・ビスカイノを日本に派遣した。一行は家康公および秀忠公に謁見し、駿府の家康公にお土産をもってきたが、そのひとつこそ金銅製の「洋時計」であった。これは一六一六年に家康公が薨去した後、家康公の手沢品として久能山東照宮に納められ、時を刻むことこそなかったが、長い間大切に保管されてきた。

今回、フェリペ六世ご夫妻がご覧になった「洋時計」は、国宝級の重要文化財に指定されていて、スペイン(メキシコ)と日本との長く親密な関係を雄弁に物語る生き証人である。従って、殿下ご夫妻がお忙しい日程を割いて、わざわざ静岡の地にまで足を運んでご覧になったとき、さぞかし感動されたことであろうことは想像に難くない。日本とスペインの皇室同士の深いつながりには、こうした庶民同士の温かい交わりがあったからである。

(ほんだ・せいじ 神田外語大学教授)

【エッセイ 2】

定年退職を迎えて

江藤 一郎

2017年3月に神田外語大学を定年退職しました。昨年の末に最終講義の話があったのですが、今年度も非常勤として、スペイン語専攻の授業を持つことになっていた上、なによりも最終講義に相応しいテーマを思いつかなかったので、断りました。しかし、一度田中菊雄『わたしの英語遍歴』をまねた「私の語学遍歴」で語学好きを披露しようかと考えました。

1959年の中学入学時の英語の教科書は”Jack and Betty”で、ラジオで「百万人の英語」を聞き始め、英語が好きになった二年生の時、高津春繁の『比較言語学』、『印欧語比較文法』に出会い、印欧語を将来研究したいと思いました。まず日仏学院に行き、Mauger Bleuでフランス語を始めました。高校に入り、代々木ゼミナールの「受験フランス語」を暁星学園や白百合学園の学生たちと一緒に受け、大学はフランス語で受けました。

高校二年生の夏休みにアテネ・フランセで大村雄治先生のラテン語を受けたのですが、集中講義でまったくついていけなかったので、大学に入り、ラテン語を取り、アモロス先生の『ラテン語の学び方』の単語集作成を手伝いました。1972年9月にグラナダ大学に留学した時、文学部のラテン語を2年間科目登録して、単位を取得しました。当時の試験は、辞書持ち込みで、授業で読んだことのないラテン語文をスペイン語に訳すものでした。

ドイツ語は、高校時代、慶應外語の冬の短期講座で、関口存男の文法書で学びました。ロシア語は、日ソ学院の通信講座で勉強しましたが、なかなか覚えられなかったので、大学でロシア語を専攻したいと思いました。しかし、担任と父親に反対され、スペイン語を選びました。高校時代のラジオ講座のスペイン語講師は荒井正道先生でした。大学に入って、外国語学部で選択のロシア語を取り、理工学部のロシア語も聴講しました。1972年にスペインに留学した時は、ロシア語にこだわり、船で横浜からナホトカへ行き、さらにシベリア鉄道でモスクワまで行きました。ロシア人は別の車両でしたが、そこまで行ってロシア語を使いました。モスクワから、列車を乗り継いでグラナダへ行きました。旧ソ連のブレストを出る時、線路の幅が狭くなるため、車軸の狭い台車に替え、さらに、パリから寝台夜行列車 Puerta del Sol に乗って、スペインのイルンに入るときには、また線路の幅が広がるため、1時間以上列車に乗ったまま台車交換場の中にいました。南フランスからバルセロナまでは、当時すでに、フリーゲージトレインのタルゴが走っていました。

1975年に大学院に入学してギリシャ語と直野敦先生にルーマニア語を習いましたが、その頃は比較研究は私には無理だと悟っており、スペイン語研究だけでも大変だったので、ロマンス語学会にも入りませんでした。

「1965年の大学一年の時の教科書に不定過去、可能法とあるのが、教師になると点過去、直説法過去未来と名称が変わった」とか、「挨拶のところに、¡Felicidades por su santo! とか、¡Bienvenido! の返事として ¡Bienhallado! を使うと書いてある」とか、また「当時は después de que の後に、過去のことならば直説法過去形を使うと習ったが、今では事実でも接続法過去-ra 形がスペインでは好まれる」とか、「英語の He told me to go. の訳は、Me dijo que fuera. が普通だが、若者は Me dijo de ir. をブログで使っている」など、『スペイン語の今と昔』を最終講義のテーマにしてもよかったのではないかと今は思っています。

(えとう・いちろう 神田外語大学名誉教授)

【エッセイ 3】

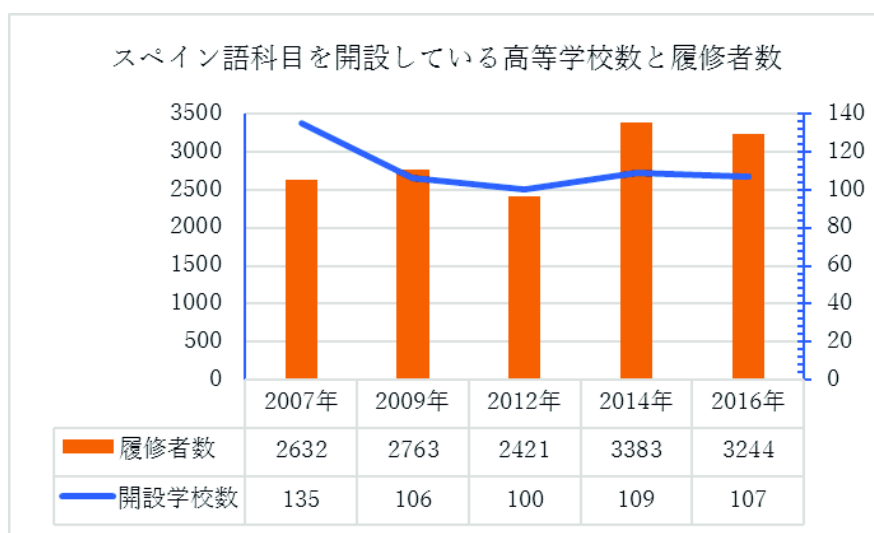
わが国の高等学校におけるスペイン語教育について

青砥 清一

文部科学省の調査によると、平成 28 年（2016 年）5 月時点でスペイン語の科目を開設している高等学校は、全国で計 107 校（国公立 82, 私立 25）を数える。中国語、韓国・朝鮮語、フランス語につぎ、第 4 位を占める。履修者数は 3,244 人であり、ドイツ語にほぼ比肩し、第 5 位に位置する。6 位以下とは大きく差が開いている。

順位	言語名	開設学校数	履修者数
1	中国語	504	17,210
2	韓国・朝鮮語	328	11,137
3	フランス語	209	7,912
4	ドイツ語	102	3,542
5	スペイン語	107	3,244
6	ロシア語	25	738
7	イタリア語	13	295
8	ポルトガル語	9	203

下のグラフは、過去 10 年におけるスペイン語科目開設学校数と履修者数の推移である。



(文部科学省『高等学校等における国際交流等の状況について』より作成)

開設学校数は2007年の135校から2016年の107校へと21%減少したものの、履修者数は2014年に3千人を超え、2007年からこの10年で29%の増加をみた。

ひとくちにスペイン語科目を開設しているといっても、教育内容は学校によってさまざまである。学習指導要領に準拠し、選択外国語科目として週二回ほどの授業をしているところもあれば、「総合的な学習の時間」における国際理解の一環として週一回、文化紹介を織り交ぜながら簡単な日常会話を扱っているところもある。ただし前者においても、生徒の学習意欲を高めるため、文法だけでなく文化紹介もとりいれているようである。

教材には大学の第二外国語用テキストを使用しているところが多いようだが、当然ながら学習指導要領に対応して作られておらず、大半のものが文法中心の構成であるため、総合学習における国際理解としてのスペイン語クラスには適さない。スペインで発行されているELEのテキストは、文化的コンテンツが比較的豊かであるが、すべてスペイン語で書かれているため、日本の高校生にはハードルが高い。履修者が全国で3千人を超えている現状に照らせば、日本語で書かれた高校生向けテキストがいくつかあってよい。

さいごに、興味深い取組みとして、慶応義塾志木高等学校の『ことばと文化』という授業を紹介したい。総合学習の一つであり、スペイン語を含め24の言語を学ぶことができる。受験や就職に結びつけるという発想から一線を画し、「言語に優劣はない」ことを自然に学ぶという理念を掲げている。週一回の授業では、前半に文法と会話を、後半にスペイン語圏の文化と歴史を学ぶ。また、座学にとどまらず、実際にタコスをつくるなど、スペイン語圏の文化に触れる活動も採り入れることで、充実した授業を展開している。

<参考文献>

アスティゲタ、ベルナルド、「中高等学校におけるスペイン語教授法：-現状と問題点、改善のための情報と提言-」『神奈川県立国際言語文化アカデミア紀要(1)』85-99頁、2012年

後藤雄介・石井登・浜邦彦・岩村健二郎、「高等学校におけるスペイン語教育の現状と展望」『早稲田教育評論』24巻1号、45-62頁、2010年

寸田知恵、「高校生用スペイン語教科書作成のための一考察」『関西大学外国語教育フォーラム』13巻、99-106頁、2014年

文部科学省、『高校生の留学生交流・国際交流等に関する調査研究等 平成18・20・23・25・27年度高等学校等における国際交流等の状況について』（2017年9月8日閲覧）

http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/1323946.htm

慶應義塾志木高等学校

<http://www.shiki.keio.ac.jp/>

(あおと・せいいち 神田外語大学准教授)

【書評 1】

小阪知弘『村上春樹とスペイン』（国書刊行会、2017年）

柳原 孝敦

小阪知弘『村上春樹とスペイン』には、まとめるに四つほどの焦点がある。1) 村上春樹におけるスペイン、2) スペインにおける村上春樹、3) 村上春樹と三島由紀夫の比較（スペインを媒介として）、4) 村上春樹論、の四つである。

「村上春樹におけるスペイン」というのは、作家の小説やエッセイからスペイン語やスペインおよびその他のスペイン語圏の国々に言及した箇所を洗い出す作業のことだ。後藤雄介がかつて、TVスペイン語講座のテキストに連載していたコラムで、村上春樹の小説に現れるスペイン語（圏文化）のことについて書いたことがあった（2004年9月号。その後『語学の西北—スペイン語の窓から眺めた南米、日本文化模様』〔現代書館、2009〕に所収）。村上春樹というとアメリカ合衆国（その文学・文化）との関係のみが多くの人々の印象には残るのかもしれないが、なるほど、村上はまたスペインやメキシコなど、スペイン語圏のことにも触れている。そういう視点を教示して新鮮であった。後藤の仕事には触れていないけれども、小阪知弘はまずこの路線を踏襲し、村上作品で言及されているスペイン語圏の国々、スペイン語などについて点検することから始めている。後藤がサーヴェイしてから十数年の月日が経った今、ましてや紙幅の制限されていた後藤よりもはるかに徹底したこの調査であるから、村上春樹とスペイン語との関係はより深く見える。

サーヴェイの徹底ぶりが小阪の唯一のメリットではない。同時に彼は村上作品におけるスペイン語話者が果たす呪術的役割にも注意を促す。たとえば主要人物のひとりミュウとセックスすることによって「こちら側」の世界と「あちら側」の世界の融合のための媒介となる『スプートニクの恋人』のフェルディナンド（フェルナンドであるはずのスペイン人）などだ。こういう巫女のような役割は、村上作品においては女性が果たす場合が多いとの認識は一般に共有されていると思うのだが、それだけにこの指摘は新鮮である。

小阪が叙述する「スペインにおける村上春樹」とは、作家がスペインに行ったときの記録と、スペインにおいて村上春樹がどのように受け入れられ、読まれ、影響を与えているかというものの分析だ。焦点化されるのはイサベル・コイシェ、特に彼女の映画『ナイト・トーカー・デイ』。コイシェが村上ファンであることはつとに知られた話だが、小阪はまた作家がバルセロナでコイシェに会い、彼女の映画のサントラを収集していると告白したことも教えてくれる。あるいはコイシェが一方向的に村上の影響を受けているだけでなく、村上春樹もまたイサベル・コイシェから何かを得ているのかもしれない。

村上春樹と三島由紀夫の比較は、スペインやスペイン語、スペイン文学への態度の違いを通じて検討される。これは小阪の前作『ガルシア・ロルカと三島由紀夫』（2013）との繋がりというか、その余滴の再利用とでも言うべきものだろうか。スペインにまつわることに対する態度の差異だけ見ても、この二人の小説家の差異は鮮やかであり、私たちの彼らに対する理解は強化されるだろう。

ひとりの村上春樹ファンとしては、最終章の村上春樹論「死者に祈りを捧げる文学」も気になるところ。かつて野谷文昭は横浜育ちの感受性を発揮して芦屋・神戸で育った村上春樹の海岸という原風景を描写して村上ファンたちを唸らせたものだが（「消えた海岸のゆくえ」『ユリイカ』1989年6月臨時増刊号、後に『越境するラテンアメリカ』〔五月書房、1989〕）、

作家自身とほぼ共通の出自を持つ小阪は、さらに本書の性格の要請に応じて、それを作家のバルセロナ志向に結びつけて新たな展開を提示している。

小阪が浮き彫りにしている村上春樹像の中で最も興味深いもののひとつが、関西弁で考えている限り（「複数言語による思考の分割」がない限り）小説は書けなかったであろうとする本人の観測だ。小阪はここから話をずらし、日本語／英語／スペイン語の「言語の三角形」の中に捉えて作家の創作の秘密に迫ろうとする。しかし、ここはもう少し理論の視点からの考察が欲しかったところだ。

村上春樹がデビュー作『風の歌を聴け』の初稿の執筆が思ったようにならず、発想を転換して英語で書いてみたら道が開けたという話はつとに知られている。そこである種の文体の手かかりを得て、それを日本語の創作に活かしたのだという。創作の出発点に翻訳があることを示すエピソードだ。作家自身が関西弁／標準語の言語移行をも「複数言語による思考の分割」と捉えているのなら、今、日本語／英語／スペイン語という三角形のそれぞれの言語の個別性は、一旦は捨象していいのではないか。ことは翻訳論という文学理論の最前線の問題であり、まずはこの観点からの村上春樹論が十全に論じられることが必要なのではないか。そうした作業の後に、作家の囚われた「言語の三角形」（私としては四角形と認識したい）の個々の角の個別の重要度がより鮮明に浮かび上がってきたのではないだろうか。この点におけるさらなる展開を期待する。

（やなぎはら・たかあつ 東京大学教授）

【書評 2】

エミリア・パルド＝バサン『ウリョーアの館』（大楠栄三訳、現代企画室、2016年）

花方 寿行

2015年刊行の『ドニャ・ペルフェクタ』に引き続き、大楠栄三氏によるスペイン19世紀を代表する長編小説の翻訳が刊行されたのは、この出版不況のご時世、出るとしても黄金世紀か現代に偏りがちなスペイン文学の翻訳紹介という意味でも嬉しいし、2年連続の同じ訳者による翻訳刊行というのも喜ばしい。もちろん大楠氏以上に精力的に翻訳を刊行されている方もいらっしゃるのだが、19世紀文学の場合出版社に企画を認めてもらい、しかも継続して出してもらおうということ自体、かなり大変だったのではないかと推察されるからだ。

本書『ウリョーアの館』はパルド＝バサンの代表長編だが、これが本邦初訳。スペイン自然主義文学を代表し、女性作家としての側面にも近年フェミニズム・ジェンダー研究の立場から注目が集まる彼女の作品だが、今まで短篇数作以外日本では翻訳されていなかった。自然主義としてはクラリン、ガルドスの、同時代の女性作家としてはロサリア・デ・カストロの代表作が（一部としても）既に翻訳されていることを思うと、やや紹介が遅れた感があるが、かわりに大楠氏の読みやすい訳文で接することができるという利点もある。特に「古典は読みにくそう」という先入観のある方には、これを機に是非気軽に手に取っていただきたい。

ガリシア地方の没落貴族の家にやって来た若い神父と、彼の媒もあり一家の気風を立て直すべく嫁いで来た女性の試みが、旧弊で暴力と腐敗が蔓延する環境下で挫折を強いられてゆくまでを描いた本作は、ガルドスの『ドニャ・ペルフェクタ』やその影響を受けたベネズエ

ラのカジェーゴスの『ドニャ・バルバラ』と比較すると、1つのトポスを形成していることが分かる。19世紀イスマノアメリカにおいては、サルミエントの定式に従い「文明と野蛮」と評されることの多いこの対立構造は、広く19世紀における「近代化と伝統」の葛藤・衝突のバリエーションだったのであり、その意味では島崎藤村の『夜明け前』などと並べて論ずることもできよう。ただ熱心なカトリックでもあったパルド＝バサンの興味深いところは、改革を試みる男女が自由主義的な革新派ではなく、むしろカトリックの「王道」たる美德を規範として重んじていることにある。しかし本書は決して抹香臭い教訓話にはならない。人物に象徴的な役割を振り分け、あえて図式的な対立構造を導入し展開する『ドニャ・ペルフェクタ』や『ドニャ・バルバラ』に違和感を覚えた読者には、カトリックでありつつフェミニストであったパルド＝バサン自身の備えた矛盾を体現するかのとき本書の登場人物が示す心理の複雑さや葛藤は、より現代的でリアルなものに感じられるだろう。

巻末に加えられた訳者作成のパルド＝バサン年譜も詳細で読み応えがあり、作品読解の助けになる。あえて不満を記すならば、『ウリョーアの館』そのものがどのように論じられ評価されてきているかの紹介や、続編『母なる自然』のもう少し細かい紹介（基本的に単独で論じられることの多い『ウリョーア』だが、いかにも「次作に続く」的な終わり方をするので、先が気になる読者も多いだろう）も欲しかったが、このあたりは紙幅の関係もあったのだろう。まずは本書刊行を素直に言祝ぎたい。

(はながた・かずゆき 静岡大学教授)

【書評 3】

セサル・バジェホ『セサル・バジェホ全詩集』（松本健二訳、現代企画室、2016年）

花方 寿行

あえて誤解を怖れずに書き始めさせていただくが、松本健二氏が日本翻訳大賞を受賞されたという朗報を耳にして、喜びつつも「あれ？」と思った方は、僕の他にはいなかったらうか？ もちろん松本氏の受賞への「あれ？」ではない。受賞作品が『ポーランドのボクサー』だったことについてだ。いや、もちろんここで誤解をしてほしくはないのだが、訳文の巧さ、ボラーニョ作品に始まる現代イスマノアメリカ小説の翻訳紹介における、的確でさすがと唸られる作品選択眼は、『～ボクサー』においても十二分に発揮されているし、それが高く評価されるのはもちろんよく分かる。他の年であったなら、『～ボクサー』での受賞に何の「不満」もない。しかし昨年の松本氏の訳業で最も高く顕彰されるべきなのは、『セサル・バジェホ全詩集』ではないかと僕は思わずにいられないのだ。

なるほど20世紀初頭ペルーの前衛詩人バジェホの評価は世界的に確定しており、日本語で読める文学史書や辞典類でもその名を目にするのだから、作品選択眼や「日本初紹介」への評価は当てはまらないだろう。しかしこれまで松本氏自身が先行して発表されたものを除けばほとんど翻訳のなかった、しかもスペイン語で読んでも難解なバジェホの前衛詩を、何と一気に全て翻訳紹介したという偉業は、もっと高く評価されていい。マリアテギが言及し、インディヘニスモ文学の枠組みで論じられることも多い『黒衣の使者ども』から、難解さにおいては右に出るものの少ないスペイン語前衛詩の金字塔『トリルセ』、死後出版のため詩集としてのまとまりには欠けるにせよやはり難解で優れた詩を多々含む『人の詩』、そしてスベ

イン内戦に対するイスパノアメリカ作家の積極的なコミットの成果としてはおそらく最も有名な『スペインよこの杯を我から遠ざけよ』に至るまで、スペイン語版も通常は4冊になる作品が全て日本語で、しかも1冊で読めるようになったのだ。

散文よりも詩を上位に置く古い文学観には僕は与さないし、散文であれば常に詩よりも訳しやすいわけでもない。だが少なくとも難解で知られるバジェホ作品をこれだけの量、全て読みやすい日本語に直した力業は、大いに賞賛に値する。あえて言えば原文より（これでも）分かりやすくなっているきらいもあるが、意味的には難解でも響きやイメージの連鎖で惹きつけるバジェホの読ませる力を訳文で表現するには、論理の引っかかりをある程度軽減する必要もあっただろう。原文の飛躍を表現するためにあえて意味的には全く異なる日本語で「超訳」をするという試みを頭から否定するものではないが、松本氏のように原文を尊重しつつ日本語の現代詩としてずっと読めるレベルに仕上げるのは、遥かに好ましく、かつ遥かに難しい。バジェホに関心はあっても尻込みをしていた読者にとっては、これほどありがたい訳書はあるまい。

なお今や原著者名ではなく松本氏の名前で本を手取るコアなファンも増加中らしいが、松本氏の小説翻訳に惹きつけられた方には、是非本書を手にとっていただきたい。純粋に翻訳者としての氏の力量を、あるいは現代詩人（とあえて言おう）としての才能を堪能するには、本書に勝るものはない。

(はながた・かずゆき 静岡大学教授)

【書評 4】

エドゥアルド・ハルフォン『ポーランドのボクサー』（松本健二訳、白水社、2016年）

久野 量一

1. エドゥアルド・ハルフォンはグアテマラ出身の作家。1971年生まれ。グアテマラの作家ということで、ミゲル・アンヘル・アストゥリアス、ロドリゴ・レイ・ローサの後、スペイン語で書く新世代のラテンアメリカ作家といえいいかという、これがなかなか難しい。

2. 日本語版をみたときずいぶん分厚いと思ったら、スペイン語版の原書 *El boxeador polaco* (Editorial Pre-textos, 2008) の6篇の短篇にプラスされて合計12篇が入っている。「訳者あとがき」によれば、これがハルフォン流の翻訳書の出し方で、翻訳言語ごとに内容を変え、翻訳書はいつも新しい本になっているという。だから日本語版の内容は世界で一つしかない。英語版は日本語版から2篇を引いた10篇。さてどれが引かれているのか？日本語版を読んでから想像すると面白いと思う（聞いてくれれば答えは教えます）。

3. 上に書いたこととかわってくるのだが、この本は一篇ごとに内容の独立した作品の寄せ集めではなくて、エピソードが本を通してところどころ重なっていて、全体を読むと、そのエピソードのつながりやドラマの起伏やクライマックスによって、まるで一冊の長篇小説を読み終えたかのような印象を与えることに成功している。10篇からなる英語版もまた同じであろうと予測がつく。ここがこの本のものすごいところだ。

4. といっても短篇としての独立性が欠けているというのではない。例えばこの本の最初の作品はハルフォンによる短篇論といってもいいような内容である。スペイン語圏のみならず、長篇の書き方についての本はなかなか見当たらないが、短篇の書き方についてのマニフ

エストや極意なら、オラシオ・キローガからコルタサル、リカルド・ピグリアなどたくさんある。ハルフォンはそれを短篇そのものでもって見せ、大学における文学の授業という設定にグアテマラの「今日の問題」を絡ませている。もう感服するしかない。

5. 短篇ということでは付け足すと、21世紀に入ったあたりからだと思うが、スペイン語圏では多くの若手・中堅作家を集めた短篇集の出版が相次いでいる。ホルヘ・ボルピ（1968年生）、フアン・ガブリエル・バスケス（1973年生）、アレハンドロ・サンブラ（1977生）といった最近日本で長篇が翻訳紹介されている作家はほとんどこういう短篇集の常連である。もちろんハルフォンもその一人だ。

6. ただしハルフォンにはもう一つ入口がある。それは彼がユダヤ系の作家ということだ。冒頭で言った「難しい」がこれ。本書を貫くテーマは彼がユダヤ人であることとどう向き合うか、とも言える。細かく書く余裕はないが、最後の「修道院」を書くに当たってハルフォンはアルゼンチンのユダヤ系作家マルセロ・ビルマヘルと喧嘩した。ビルマヘルはシオニスト。

7. そしてハルフォンの祖父はホロコースト・サバイバーである。本を通してつながりのあるエピソードの一つにこの祖父の経験がある。決してアウシュヴィッツについて語らなかつた祖父がある日、孫のエドゥアルドに語る。このような設定で書かれた表題作は本書の真ん中6番目に置かれている。しかしこの話には驚くべき後日談があることを、読者はその後知らされる。ここでも感服。

8. ラテンアメリカにおけるユダヤ系（やアラブ系）の物語は、主に歴史書を通じて知ることが多かったのではないか。ラテンアメリカ各地には『××国におけるユダヤ人の歴史』というような本があるはずだが、文学では例えば「*Revista iberoamericana*」が2000年（191号）に特集を組んでいる。ハルフォンが作家になろうとした時期である。今ではユダヤ系、アラブ系作家をまとめた短篇集が出ている（*Delta de las arenas: cuentos árabes, cuentos judíos*）。ここにはハルフォンも当然入っていて、アリエル・ドルフマンの名前もある。

9. ハルフォンはすでに来日したことがあり、飯島みどり氏によるインタビューを読むことができる。掲載されたのは『世界』（岩波書店、2014年8月号）。同年6月号には「最後のトルコ・コーヒー」という短篇も掲載されている。日本語の読者はかなり得をしている。

10. そして最後、本書は2017年第三回日本翻訳大賞の受賞作である。エドゥアルド・ハルフォンさん、松本健二さん、おめでとうございます。

（くの・りょういち 東京外国語大学准教授）

【書評 5】

神田外語大学＝編『環太平洋の言語と文化』（神田外語大学出版局 2016年）

環太平洋の言語と文化の旅

柳沼 孝一郎

ここに来て、環太平洋経済連携協定（TPP）の行く末が危うくなってきた。本年4月に来日したペンス米副大統領が「TPPは過去のものだ」と言い切り、トランプ大統領が協定からの離脱を表明する大統領令に署名したからだ。

この環太平洋地域（Cuenca del Pacífico）の国際交流の源泉は、スペインおよびポルトガル

のイベリア両国が牽引した「大航海時代」に求められる。東廻り航路を拓いたポルトガル王室はアフリカ大陸を迂回し東アジアに進出、西廻り航路を駆ったスペイン王室は新大陸到達後にアメリカ大陸に確固たる植民地を築き、さらに西へと移行させ、ロアイサ、ビリャロボスさらにレガスピラの遠征隊によってフィリピンを領有化、のちにイベリア両国は「ジパング」にまで辿り着いた。やがてザビエルをはじめ宣教師によるキリスト教の流布と相まって、南蛮貿易が興隆し、ヨーロッパ文化がもたらされ、巡察使ヴァリニャーノに率いられた「天正遣欧少年使節団」はスペインからローマに渡った。しかしこうした現象に秀吉は危機感を抱き、そこにオランダとイギリスが参入したことで事態はより紛糾し、徳川幕府はキリシタン弾圧を断行、ジパングは「鎖国」政策によって自ら国を閉じた。徳川幕府のお膝元で旧教国のスペインとポルトガルと新教国のオランダとイギリスが対峙、まさに「白い伝説」と「黒い伝説」が繰り返され、それは「文明の衝突」でもあった。

250年ののち、ペリー来航によってジパングは開国を余儀なくされた。明治政府はその後、初の対等平等条約である「日墨（メキシコ）修好通商航海条約」を機に「榎本武揚メキシコ殖民団」を送り、以後、「佐倉丸」ペルー移住や「笠戸丸」ブラジル移住など「中南米移住」が国策として大々的に推進され、二つの世界大戦を挟んで多くの日本人が「もうひとつの太陽を求めて」（En busca de otro sol）新大陸に渡り、先駆者「サムライ」たちは各所に足跡を残してきた。そして今日、経済連携協定（EPA）や自由貿易協定（FTA）、太平洋同盟（Alianza del Pacifico）、日系企業の中南米進出など経済交流のみならず、文化交流そして大学間学術協定による交換留学等々、日本と環太平洋諸国との交流はより一層活発化し、多岐に渡っている。

この環太平洋地域の言語と文化について、それぞれの国・地域研究を専門とする教員が各自の「フィールド・ノート」も併せて紹介し、創立30周年記念事業の一環として編纂されたのが本書、神田外語大学＝編『環太平洋の言語と文化』（神田外語大学出版局）である。本書は、カナダ、アメリカ合衆国、メキシコ合衆国、ユカタン半島とカリブ海域、グアテマラ共和国、ブラジル連邦共和国、ペルー共和国、チリ共和国、オーストラリア連邦、インドネシア共和国、タイ王国、ベトナム社会主義共和国、中華人民共和国、大韓民国そして日本の「異言語体験と異文化体験」に誘ってくれる。その先に在るのは、環太平洋の国々が織りなす深遠な言語と文化の世界である。

（やぎぬま・こういちろう 神田外語大学副学長）

【書評 6】

牛島万（編著）、坂東省次（監修）

『現代スペインの諸相——多民族国家への射程と相克』（明石書店 2016年）

加藤 伸吾

今回は監修に回っているが同じ坂東省次氏の『現代スペインを知るための60章』（2013年、明石書店）など、学部1、2年生や一般初学者向け一連の書籍の系譜上にあるかと思われたがそうではなく、アカデミックな方向へ一歩踏み込んでいる。詳細な注と西語など外国語文献が収録された参考文献リストが付されている。

ただアカデミックな方向といってもどの程度か、本格的な学術論文集か、学部3・4年や

修士向けの研究入門を目指しているのかがわからなかった。編著者が著者の「はしがき」及び第6章を見るに、牛島万氏としては、学術論文集を目指していたのではないか。一方、他のほとんどの章は与えられたテーマの事実関係の整理及び研究レビューと読むことができ、その意味では実質的には研究入門となっている。

ただいずれにせよ、評者はスペイン現代史を専門としつつも寡聞にして知らなかったことも多く、どの章も改めて大変勉強になった。研究入門として授業のレファレンスに記載し、学部生などに一読を勧めるつもりである。

その上で、以下気になった点についていくつか申し述べたい。

まずはサブタイトル「多民族国家への射程と相克」とあるが、日本語として違和感がある。「多民族国家への射程」と「多民族国家の（抱える）相克」を1つにまとめたと推察されるが、前者では主体が多民族国家を観察する我々なのに、後者では多民族国家が主体となっているからであろう。

次に各章から、「はしがき」では学術論文集としての問題意識が述べられるがリサーチ・クエスチョンはなく、問題意識も妥当とは言い難い。例えば、スペイン民主化の不全性と『『情熱的』な国民性』の関連が述べられる（i ページ）。もし「国民性」のような客観的記述の多分に困難な概念を民主化との関連で扱うなら、例えば著名なホフステッド指数（国民性に関する多国間比較指標）のような多少は科学的な取扱いが可能なものの方が良かったのではないか（Gorodnichenko and Roland: 2015）。同指数には「個人主義的か集団主義的か」の項目があり、多国間比較としては、雑駁に言えばスペインなど個人主義的傾向の強い国ほど民主化しやすいという結論になっている。もしスペインの大知識人たちが指摘する「国民性」を取り上げなければ、「情熱」ではなく「個人主義」にすれば、例えばホフステッド指数が実証に耐えるかを全体としてのリサーチ・クエスチョンとし得たかもしれない。

また、同じ「はしがき」で「フランコ死後11年間、民主化の途上にあったスペインはポルトガルと並んで当時のECに加盟が認められる『民主主義国家』ではなかった」とあるが、これは端的に間違いである。まず、正確には11年ではなく10年程度、具体的には1975年11月20日のフランコ死亡から1985年6月12日の欧州諸共同体（EC）加盟条約調印、あるいはその発効日1986年1月1日までの約10年である。さらに、その期間を要したのは、民主国家として欧州から認められなかったからではなく、認められた上で1978年11月と比較的早期に交渉に入っている。交渉長期化の主要因は、域内農業国との利害衝突に伴う農林水産行政面の国内外調整コスト肥大化にそれを求めるのが一般の見解ではなかろうか。少なくとも、「民主主義国家ではない」と断言するなら、通説的ないわゆる手続的民主主義に代わる民主主義国家の定義を提示しておくべきだった。

第1章「スペイン政治社会の変遷」（川成洋）では、いわゆる「23-F」クーデター未遂事件につきかなり詳細に述べられる一方、「変遷」としつつも、少なくともこの10年程度のスペイン政治の最も大きな変動の一つである政党システムの変容、つまりポデモスと市民党の台頭による<二大政党（国民党・社労党）+蝶番政党>から<四大政党（国民党・社労党・ポデモス・市民党）+蝶番政党>へのシフトに触れられていない。23-Fにしても、ジャーナリストや現代史家に評価の高い、平積みベストセラーCercas: 2009を踏まえた形跡がない。

第6章「カタルーニャ分離独立をめぐる相克とその行方」は、編著者牛島氏入魂の力作と感じられた。特に、国際法の観点からカタルーニャ独立問題を扱う視点は、管見の限りでは世界的にも貴重と考えられ、評者が最も勉強になった章の1つであった。ただ欲を言えば、

第一に、これもリサーチ・クエスチョンが不明瞭で、学術的論考として扱うには論点が拡散し過ぎている。第二に、研究入門として扱うにしても、カタルーニャ・ナショナリズムに関する問題系といえば、言語政策論、国内法や歴史学の観点から邦語だけでも業績がかなりあるテーマだが、参考文献の邦語業績が過少で、特に学部3・4年生、博士前期課程の学生が読むには不親切な印象がある。

最後に索引について、人名索引は1ページのみ、分量自体は問題ではないが、その中にスペイン語人名のスペルミスがぱっと見ただけでも6箇所ある。近年さらに増すスペインへの注目（本稿執筆中カタルーニャの連続テロ事件が勃発した）という事情もある。本書の重版には、評者としても疑いを持たないしそれを切に願うものだが、その際の修正を強く望む。

参考文献

Cercas, J. 2009. *Anatomía de un instante*. Barcelona: Mondadori.

Gorodnichenko, Y. and Roland, G. 2015. "Culture, Institutions and Democratization." *NBER Working Paper*, 21117. Cambridge: National Bureau of Economic Research.

(かとう しんご 慶應義塾大学専任講師)

【新刊案内】

2016年5月から2017年5月までのスペイン・ラテンアメリカ関係の新刊書です。遺漏があるかもしれません。ご教示願います。

- 『第三帝国』、ロベルト・ボラーニョ（著）、柳原孝敦（訳）、白水社、2016年7月
- 『セサル・バジェホ全詩集』、セサル・バジェホ（著）、松本健二（訳）、現代企画社、2016年7月
- 『デイリー日西英 3 か国語会話辞典 カジュアル版』、山村 ひろみ（監修）、三省堂編修所（編）、三省堂、2016年7月
- 『ドン・アルバロ あるいは運命の力』、リバス公爵（著）、稲本健二（訳）、現代企画社、2016年8月
- 『日本語と比べるスペイン語文法』、三好準之助（著）、白水社、2016年8月
- 『現代スペイン演劇選集 III』、田尻陽一（監修）、カモミール社、2016年9月
- 『おいしいスペイン語』、高垣敏博（著）、IBCパブリッシング、2016年9月
- 『ゴヤ「戦争と平和」』、大高保二郎（著）、新潮社、2016年9月
- 『ラテンアメリカ文学入門 — ボルヘス、ガルシア・マルケスから新世代の旗手まで』、寺尾隆吉（著）、中央公論新社、2016年10月
- 『方法異説《フィクションのエル・ドラード》』、アレホ カルペンティエール（著）、寺尾隆吉（訳）、水声社、2016年10月
- 『スペインの歴史を知るための50章』、立石博高（編著）、内村俊太（編著）、明石書店、2016年10月
- 『襲撃《フィクションのエル・ドラード》』、レイナルド アレナス（著）、山辺弦（訳）、水声社、2016年12月
- 『ポケットマスターピース 13 セルバンテス』、野谷文昭（編）、三倉 康博（編集協力）、吉田彩子（訳）、集英社、2016年12月
- 『ドン・キホーテ — 人生の名言集』、佐竹謙一／菅田百合絵（編訳）、国書刊行会、2016年12月

- 『現代スペインの諸相—多民族国家への射程と相克』、牛島万（編著）、坂東省次（監修）、明石書店、2016年12月
- 『ムッシュー・パン』、ロベルト・ボラーニョ（著）、松本健二（訳）、白水社、2017年1月
- 『ドン・キホーテ [前篇]』（セルバンテス全集②）、ミゲル デ・セルバンテス（著）、岡村一（訳）、本田誠二（注釈）、水声社、2017年2月
- 『傷痕《フィクションのエル・ドラード》』、フアン・ホセ・サエール（著）、大西亮（訳）、水声社、2017年2月
- 『村上春樹とスペイン』、小阪知弘（著）、国書刊行会、2017年3月
- 『改革と革命と反革命のアンダルシア』、渡辺雅哉（著）、皓星社、2017年3月
- 『スペイン初期中世建築史論—10世紀レオン王国の建築とモサラベ神話』、伊藤喜彦（著）、中央公論美術出版、2017年3月
- 『ドン・キホーテ [後篇]』（セルバンテス全集③）、ミゲル デ・セルバンテス（著）、岡村一（訳）、本田誠二（注釈）、水声社、2017年4月
- 『場所《フィクションのエル・ドラード》』、マリオ・レブレロ（著）、寺尾隆吉（訳）、水声社、2017年4月
- 『ガルシア・ロルカ 対訳 タマリット詩集』、ガルシア・ロルカ（著）、平井うらら（訳・解説）、影書房、2017年5月

【2017年度日本イスパニヤ学会奨励賞】

2017年7月30日に開催された日本イスパニヤ学会理事会において、棚瀬あずさ氏の論文「Hibridez e intertextualidad. "Dilucidaciones" (1907) de Rubén Darío」が高く評価され、2017年度日本イスパニヤ学会奨励賞の授与が決定しました。

【『HISPANICA』編集委員より】

『HISPANICA』第62号の原稿を募集しています。論文・研究ノート・書評を投稿規定に遵い、2018年3月1日から31日（31日消印有効）の期間内にご投稿ください。

（送付先）日本イスパニヤ学会事務局

〒170-0002 東京都豊島区巢鴨1丁目24-1 第2ユニオンビル4F

（株）ガリレオ学会業務情報化センター内

多くの会員からのご投稿をお待ちしております。

【編集後記】

ご投稿いただいた先生方のご協力によりまして、会報24号を無事発行することができましたこと、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本年号では、残念ながら国際学会等に関する報告がありませんでした。来年のご投稿をお待ちします。

巻頭言、エッセイにご寄稿くださった上田博人先生、江藤一郎先生をはじめ、長年にわたりご活躍されてきた先生方のご定年を迎えられ、寂しさと時代の流れの早さを感じる一方、ご退職後も精力的に研究活動を展開されていることに深く敬服します。

（広報担当理事 青砥清一）